



あなただから、あなただから。

外科室

そのときの二人が状、
あたかも二人の身边には、
天なく、地なく、社会なく、
全く人なきがごとくなりし



Track
1
上

実は好奇心のゆえに、しかれども予は予が画師たるを利器として、ともかくも口実を
設けつつ、予と兄弟もただならざる医学士高峰をしいて、某の日東京府下の一病院にお
いて、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なく
したり。

その日午前九時過ぐるころ家を出でて病院に腕車を飛ばしつ。直ちに外科室の方へ赴く
とき、むこうより戸を排してすらすらと出で来たれる華族の小間使とも見ゆる容目よき
婦人二、三人と、廊下の半ばに行き違えり。

見れば渠らの間には、被布着たる一個七、八歳の娘を擁しつ、見送るほどに見えずなれり。これのみならず玄関より外科室、外科室より二階なる病室に通うあいだの長き廊下には、フロックコート着たる紳士、制服着けたる武官、あるいは羽織袴の扮装の人物、その他、貴婦人令嬢等いずれもただならず気高きが、あなたに行き違い、こなたに落ち合い、あるいは歩し、あるいは停し、往復あたかも織るがごとし。予は

今門前において見たる数台の馬車に思い合わせて、ひそかに心に領けり。渠らのある者は沈痛に、ある者は憂慮わしげに、はたある者は

あわただしげに、いずれも顔色穏やかならで、忙しげなる小刻

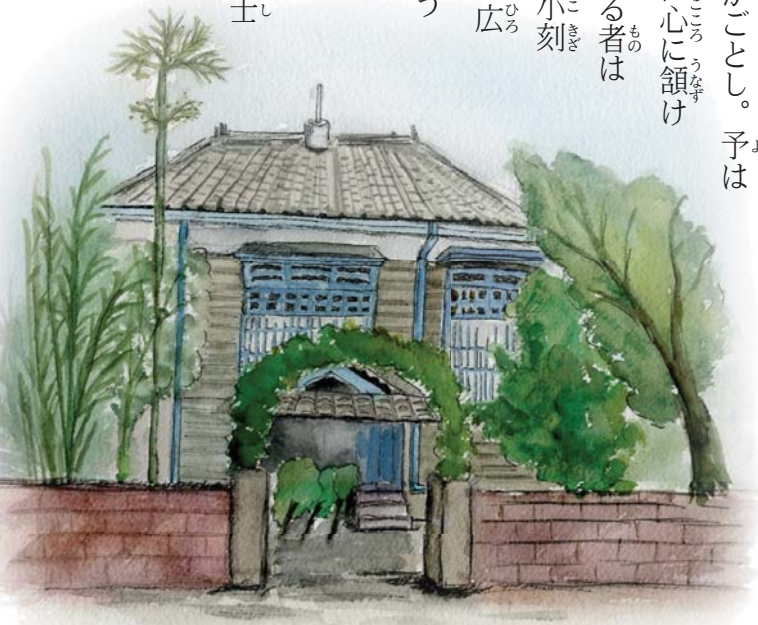
みの靴の音、草履の響き、一種寂寞たる病院の高き天井と、広

き建具と、長き廊下との間に、異様の跫音を響かしたつ、う

たた陰惨の趣をなせり。

予はしばらくして外科室に入りぬ。

ときに予と相目して、唇辺に微笑を浮かべたる医学士



は、両手を組みてややあおむけに椅子に凭れり。今には
じめぬことながら、ほとんどわが国の上流社会全体の喜憂
に關すべき、この大いなる責任を荷える身の、あたかも晚餐の
筵に望みたるごとく、平然としてひやかかなること、おそらく渠のごときはまれなるべ
し。助手三人と、立ち会いの医博士一人と、別に赤十字の看護婦五名あり。看護婦その
もの、胸に勲章帯びたるも見受けたるが、あるやんごとなきあたりより特に下した
まえるもありぞと思わる。他に女性とてはあらざりし。なにかし公と、なにかし侯と、
なにかし伯と、みな立ち会いの親族なり。しかして一種形容すべからざる面色にて、愁然
として立ちたるこそ、病者の夫の伯爵なれ。

室内のこの人々に瞻られ、室外のあのかたがたに憂慮われて、塵をも数うべく、明るく
して、しかもなんとなくすさまじく侵すべからざること観あるところの外科室の中央に
据えられたる、手術台なる伯爵夫人は、純潔なる白衣を絡いて、死骸のごとく横たわ
れる、顔の色あくまで白く、鼻高く、頤細りて手足は綾羅にだも堪えざるべし。唇の色



すこ
少しく褪^あせたるに、玉^{たま}のごとき前^{まえ}歯^ばかすかに見^みえ、眼^めは固^{かた}く閉^とざしたるが、眉^{まゆ}は思^{おも}いな
しか顰^{ひそ}みて見^みられつ。わずかに束^{つか}ねたる頭^{とう}髪^{はつ}は、ふさふさと枕^{まくら}に乱^{みだ}れて、台^{だい}の上^{うえ}にこぼれ
たり。

そのかよわげに、かつ気^け高^{たか}く、清^{きよ}く、貴^{とうと}く、うるわしき病^{びょう}者^{しゃ}の倂^{おもかけ}を一目^{ひとめ}見るより、予^よ
は慄^{りつぜん}然^{ぜん}として寒^{さむ}さを感じぬ。

医^い学^{がく}士^しはと、ふと見^みれば、渠^{かれ}は露^{つゆ}ほどの感^{かん}情^{じょう}をも動^{うご}かしおらざるものごとく、虚^{きょ}心^{しん}
に平^{へい}然^{ぜん}たる状^{さま}露^{あら}われて、椅^い子^すに坐^{すわ}りたるは室^{しつ}内^{ない}にただ渠^{かれ}のみなり。そのいたく落^おち着^つき
たる、これを頼^{たの}もしと謂^いわば謂^いえ、伯^{はく}爵^{しゃく}夫^ふ人^{じん}の爾^{しか}き容^{よう}体^{たい}を見^みたる予^よが眼^めよりはむしろ、心^{こころ}
憎^{にく}きばかりなりしなり。

おりからしとやかに戸^とを排^はして、静^{しず}かにここに入り来^きたれるは、先^{さき}刻^きに廊^{ろう}下^かにて行^ゆき逢^あ
いたりし三人^{さんにん}の腰^{こし}元^{もと}の中^{なか}に、ひときわ目^め立^たちし婦^{おんな}人^ななり。

そと貴^き船^{ふね}伯^{はく}に打^うち向^むかいて、沈^{しず}みたる音^{おん}調^{ちよう}もて、

「御^ご前^{ぜん}、姫^{ひめ}様^{さま}はようようお泣^なき止^やみあそばして、別^{べつ}室^{しつ}におとなしゅういらっしやいま

す」

伯はものいわで頷けり。

看護婦はわが医学士の前に進みて、

「それでは、あなた」

「よろしい」

と一言答えたる医学士の声は、このとき少しく震いを帯びてぞ予が耳には達したる。その顔色はいかにしけん、にわかになりに少しく変わりたり。

さてはいかなる医学士も、驚破という場合に望みては、さすがに懸念のなからんやと、予は同情を表したりき。

看護婦は医学士の旨を領してのち、かの腰元に立ち向かいて、

「もう、なんですから、あのことを、ちよつと、あなたから」

腰元はその意を得て、手術台に擦り寄りつ、優に膝のあたりまで両手を下げて、しとやかに立礼し、

「夫人、ただいま、お薬を差し上げます。どうぞそれを、お聞きあそばして、いろはでも、数字でも、お算えあそばしますように」

伯爵夫人は答なし。

腰元は恐る恐る繰り返して、

「お聞き済みでございませうか」

「ああ」とばかり答えたまう。

念を推して、

「それではよろしゅうございますね」

「何かい、麻酔剤をかい」

「はい、手術の済みますまで、ちよつとの間でございませうが、御寝なりませんと、いけませんそうです」

夫人は黙して考へたるが、

「いや、よそうよ」と謂える声は判然として聞こえたり。「同顔を見合わせぬ。」



腰元は、諭すがごとく、

「それでは夫人、御療治ができません」

「はあ、できなくともいいよ」

腰元は言葉はなくて、顧みて伯爵の色を伺えり。伯爵は前に進み、

「奥、そんな無理を謂うてはいけません。できなくともいいということがあるものか。わがママを謂うてはなりません」

侯爵はまたかたわらより口を挟めり。

「あまり、無理をお謂やったら、姫を連れて来て見せるがいいの。疾くよくならんとど
うするものか」

「はい」

「それでは御得心でございますか」

腰元はその間に周旋せり。夫人は重ねなる頭を掉りぬ。看護婦の一人は優しき声に
て、

「なぜ、そんなにおきらいあそばすの、ちっともいやなもんじゃございせんよ。うとうとあそばすと、すぐ済んでしまいます」

このとき夫人の眉は動き、口は曲みて、瞬間苦痛に堪えざるごとくなりし。半ば目を見開きて、

「そんなに強いるなら仕方がない。私はね、心に一つ秘密がある。麻酔剤は謔言を謂うと申すから、それがこわくつてなりません。どうぞもう、眠らずにお療治ができないよ
うなら、もうもう快らんでもいい、よしてください」

聞くがごとくんば、伯爵夫人は、意中の秘密を夢現の間に人に吐かんことを恐れて、死をもてこれを守ろうとするなり。良人たる者がこれを聞ける胸中いかん。

この言をしてもし平生にあらしめば必ず一条の紛紜を惹き起こすに相違なきも、病者に対して看護の地位に立てる者はなんらのこともこれを不問に帰せざるべからず。しかもわが口よりして、あからさまに秘密ありて人に聞かしむることを得ずと、断乎として謂い出だせる、夫人の胸中を推すれ

